

外国語学習における語感の問題

西 谷 俊 昭

I

日常の言語生活において、我々は、或る時は言葉を（単語なり文節なりの言語単位を）一つ一つ確認・フィードバックしながら発話しているかと思えば、また或る時は、一つの感覚・感じと言ったものを頼りに発話を形成していたりする。細かな意味の差異を明確に察知しながらも、混沌とした未分化の状態で、様々な表現の原型が表象され、より具体的な、確かな形として言語的表現が実現されるのを、微かな焦燥感をもちながら意識の中で検索しつつける。

或いは、それを言葉で的確に、説明的に、また分析的には伝達できない内容をもったものを、言わば、直観的に口の端にのぼせる。そうした時、自分の表現意図を全面的に充足してくれる言語表現が脳裏に浮かび、それを適切なタイミングで伝達出来た時、言わば、感性ピッタリの表現が得られた場合、我々は心理的に、密かな満足感で充たされ、一種の安堵の感情を得るのである。

通常、こうした言語表現、多くの場合は語彙のレベルであろうが、を検索・選択する能力を「語感」と称している。言葉の一般的用法では、この「語感」という語は、言葉がそれを使用する者、それを受け取る者としての自他に与える「感じ」という意味で、言葉に賦与された、曰く言い難い部分、感性的要素を指している。厳密性が欠けるけれども、ニュアンスという表現がその概念内容の大部分を覆うであろう。

他方、同じ言語使用レベルで、「語感」という語は、言葉に対して各人の持つ、或いは懐く「感覚」という意味でも使われ、これは言葉（表現）に対して個人または言語社会の持つ、一種の感受性を表わしている。これは先程のニュ

アンスという表現に対して、ニュアンスの識別能力とでもパラフレーズできようか。

言語の使用に際して我々は大なれ小なれ、特定の様々な表象を意識的に言語に結びつける。どこで思考が終わり、どこから言語が始まるかは未知であるから、こうした意識と言語の結合するプロセスそのものも言語使用と考えることができる。大抵、こうした表象は直接的に記号（名称）と結びつくと考えられる為、記号の外面的なイメージ、換言するならば聴覚像ないしは文字（表記）像との緊密な関係が生じてくることとなる。

従って、概念的な内容は同じであるにも拘らず、ある表現は美しく、また他方のそれは不快であったり、醜い表現・下品な言い回しであったりもするのである。あるいは、表象するものと、その言語的表現たる聴覚像との間に、感覚的な相似の関係が措定されたりする場合には、音象徴とよばれる現象が見られたりする。例えば、ドイツ語においては、spitz, Spieß, Speer, stechen, stoßen, Schere, scharf, schneiden といった語群において、正書法上では s あるいは sch という形態を採ってはいるものの、音表的には ʃ という音価をもつ単位でもって、これらの語群には、その意味内容毎に、何か尖端のある、鋭利なものを印象づけるなにもんのかが付与されている。それはあだかも、この音価と表象との間には曖昧ではあるが、或る特定の主観的な暗示関係が存していることを示唆しているかに見える。

この関係はなにも音形態をとらなくとも、書記形態であっても両者の間に連想の結びつきを感じることにはできる。日本語において、外来語表記を片仮名で行うのは多分に在来語との識別、あるいは明示機能を負わせようとする意図もあるが、他方、仮名表示では表現しきれない要素を片仮名に託しているともできる。ドイツ語でも c, ph, th, q 等の外来表記綴りはそうした機能を果たしている。これらはそれぞれ k, f, t, k という Grapheme（文字素）のヴァリエーション (Allographe) にすぎず、意味の弁別をしているわけではないからである⁽¹⁾。視覚的要素の強い言語である日本語では文字形態と感覚的・感性的内容との連関は命名に際して看過すべからざる要件であることはいうを俟た

ない。

ただ、こうした問題を取り扱う場合、言葉はたとえ音の形態をとろうが、書かれた姿をとろうが本質的には聴覚映像として機能するのであって、視覚的印象、効果を直ちに言葉の本質に結びつけてはいけなない。形に象徴的意味を読み込むのはどの民族にも共通の性向であって、西欧の一見無味乾燥なアルファベットの字母にさえ、特定の象徴的意味を帯びさせることができる。言葉というものは、発生的には聴覚機能のみを利用した伝達方式であって、一感覚機能をもって他の感覚機能をカバーしようとする為、例えば、視覚を代替するには色彩を言語化し（言語を視覚化したとも解せられるが）、色彩に象徴的意味をもたせることは、どの言語にも見られる。（「フランス語で黒い想いと言えば悲哀を表すが、日本語で腹が黒いと言えば、警戒を要する言葉となる。こちらの青二才はくちばしが黄色いと言われるが、あちらでは、白いくちばしとみなされる」⁽⁶⁾）

音と意味との間に直接連想がまだ相通じている、乃至は通じさせているのは、一般に擬声語・擬音語と呼ばれている現象で、音象徴の代表例である。これは言語外に存在する音響現象に擬音・擬声の名称を付与するものであって、言語起源論に隠然たる勢力を持つが、その反面、この現象を多く持つ言語は、言語の原始性を保っていると断罪される根拠とされることがある。

音響事象でなくとも、言語外の事態・事象を描写的に表現しようとする時には、それをも感覚的、感情的に音の象徴的（音感的）効果で表現するが、擬態語・擬象語・擬容語・擬情語という名称でもって、それぞれ伝達を旨とする事象を区別しようとしている。これらは重畳させることによって、伝達しようとする事態のありようを状態として表現するものである。（例：いらいら、プリプリ）

こうした言語現象は抽象概念を伝達するのではなく、事態・事態を感性的に、感覚的に捉えて直截に表現するものであり、また、子供の口から大多数の擬声語が聞かれるように思われるから、先に述べた言語の優劣論争の火種となるのであるが、Otto Jespersen⁽⁶⁾も述べているように子供たちが発する擬声語

は大部分、子供たちの言語創造力に負うものではなく、それらは他の普通の単語と同じく、子供たちが習得したものであることを考慮に入れるならば、擬声語は単に外界の音響を模倣したものではなく、言語外世界の言語的加工物であることがわかる。

ドイツ語にも knarren, knurren, bellen, zischen, Kuckuck, Uhu, Gans など数多の擬声語が挙げられるが、これらとても幾多の変遷を経て現在の音形態となったのであり、他の抽象的な内容を持った語と同様、言語変化の洗礼をうけた抽象体としての音響模倣であることを忘れてはならない。確かに、全語彙中に占める擬音語の数は日本語に比して、格段に少数であること、動詞に比較的多数みられること、等など日本語における現象とは若干趣を異にするのであるが、他の面からみると、我々は物事を形容するとき、欧米人に比して、擬音語と擬態語を頻繁に使用していることの証左ともなるのである。

この少なくとも欧米語と比較して日本語に特徴的な現象を解明する理論は知られていないが、日本人に特有だとされる母音、子音の認知機構の特異性にその根拠を見出そうとする神経心理学からのアプローチは外国語習得に際して、外国語音聴取訓練を能率化する理論的根拠を提供する可能性と共に、言語構造と認知・認識の関係にも示唆を与えてくれるかも知れない。問題は擬音語の多寡をもって言語の原始性を論じることにあるのではなく、二つの言語が対峙した時、双方が相異なる認識の構図を言語に直接反映した形で対峙することにあるのである。一方が概念的に、抽象的に、包括的な形で、他方が直截的に、感性的に、事象を髣髴とさせた形で捉えて表現する。こうした場合、両者の懸隔、齟齬は言語表現の構図を形成する段階ではたえようもなく大きい。

宇宙の森羅万象を表すには万象と云えども、基本的にはおよそ二千の概念があれば表現は可能だといわれているが、これは基本語彙がどの言語でも、統計を利用し、様々な付加条件を考慮しながらも、最終的には恣意的、経験的要素を加味して選定すると、ほぼ二千という量に収斂することからも裏付けられる。こうした語彙は擬音語・擬態語には極端に排他的であり、この語群は締め出されてしまう。書き言葉になると、同一人でも擬音語を回避する傾向がある

から、統計上、出現回数は減少するのである。表現のレベルが異なるのだとしても、日常、やや即興的に使用されるそれらの語群はその表現性の豊かさで、日本人の言語生活、ひいては表象の世界に大きな地歩を占めていると云わざるを得ない。

言語は多様性のある現象であるから、ある一小部分の特徴でもって、全体を推し測り、普遍化することは出来ないが、日本語は語彙的にみた場合、抽象的・包括的に事物、動作を捉える傾向があるようである。勿論、それぞれの言語は文化、伝統、自然を背景にした得意の領域を有するものであるから、そうした特徴を反映した分野は分類が細かく、微妙な差異も細大洩らさず言語表現に投影しているが、語彙の基本的な部分は、どの言語も先に述べた限られた基本的概念から分化したものから成り立っているから、その特徴は個別語で表現するか、包括した語で動作・状態を抽象した、一般的形姿で捉え、細部は他の言語要素に描写を委ねるか、といったレベルに現れる。

ドイツ語の場所の移動、前進運動を表す動詞が、前者の例として挙げられるし、その対極のものとしては日本語のそれらの対応語が好例である。

bummeln, dappeln, tänzeln, trampeln, stampfen, stolzieren, vagabundieren, tippeln, spazieren, marschieren, schlendern, trudeln, zotteln, schleifen, schweifen, schleifen, wandeln, wandern usw.

日本語では、もし漢語を使い、同音異義が頻出する不便さを容認するのでなければ、上記の動詞はほとんど「～歩く、～行く」という包括的な表現を他の付属語で補わなければならない、しかも大抵の場合、擬音語や擬態語を事態・状態を髣髴と描写するために多用しなければならない。問題はこういった分野、領域で、どのような包括的表現法がとられ、また個別的表現はどんな時にとられるのかを記述することである⁶⁾。

感性的、感覚的要素の躍動している場合を、概念を使用して、分析的に近似的表現でパラフレーズして外国語で再現することは、各人の持つ言語表現能力、描写の巧みさ、外国語の語彙容量、自国語での意味分析能力など様々なも

のが関連する複雑な過程であるが、トータルな表現の岩塊を細かく砕き、質量は同じだが、体積と外貌はまったく異なる細粒の集合体を等置させるプロセスに似ていなくもない、一種の違和感を醸し出す、妥協の作業とならざるを得ないものなのである。

各個人の言語習慣には各人の持つ特徴があり、言語の外面的な美しさ、鋭敏な音感、語彙選択の巧みさなどが相俟って *Idiolekt* と呼ばれる、個人特有の語法が生じるのであるが、そこには勿論、慣用という要素、習熟度、パターン化と言った一種の機械的反応が、言語使用の支配的部分を占めていることは否めないが、その使用する言語に存在する用法や発達の可能性についての言語的規範に対する感覚が働くので、その規範からの逸脱の程度・範囲をみずから制御しながらも、法則を拡大適用し、類推による新しい言語使用に到達することができるのである。

言語構造が課する制限を遵守しつつ、我々の表象は記号、記号結合、成句といった表現形式に、半ば習慣的に結びつけられて行く。こうした表象の雑多なものは、言語素材から大いに影響を受けるためか、或いは、特定の時期、与えられた環境において、何らかの理由から、当該の言語の話し手にとって、集团的・共同的なものになってしまう傾向をもっている。その言語社会大抵の構成員は程度の差こそあれ、明確にこうした特定の表象、概念を持ったり、或いはあだかも持っているかのように思わせられてしまいやすい。そうした表象、意識全般を総括して、我々は語感と呼んでいるのである。

II

「語感」という用語は翻訳語の系統に属するらしく、原語は *Wortgefühl* 或いは *Sprachgefühl* と目されるが、前者は殆ど文献には現れないし、後者も *Intuition* という語で代替されることもある。*Marouzeau* の言語学用語辞典にも登場しないし、英語圏での *linguistic instinct* という用語も *Whitney* による *Schleicher* からの訳語であるらしい (*Lindroth* による)。*H. Paul* によると

J. H. Campe が淵源で、Herder では Sprachengefühl という形も使用されている (Deutsches Wörterbuch)。現代語の用法では、「正しい、適切な言語使用に関する感じ、感覚」(Duden GWdS)、或いは、「母語または外国語に関して習得された知識(法則)の総体で、能動的な言語使用に際して、無意識に適用せられる。言葉を習い、それとともにそのような法則を獲得する生来の人間の能力にもとづく。文法によって意識化され、関連性が明らかにされる。」(Rudi Conrad S.120)

この直感、感覚は母語においては、かなりの程度に敏感であって、我々は自分自身の、或いは、他人の言語表現に混在する異物を、まるで「音楽家が、ミスタッチに反応するが如く」間髪を入れず感知し、適合性を損なうものを排除することができる。それは言語的脈絡 (langue の領域での関連性であるが) の、未だ理性以前の感覚、知覚であるから、非意識的な状態と明確な意識との間によこたわる現象なのである。

個人、個人の具体的・個別的な言語使用を越えた、超個人的な言語が存在するように、個人を超越した「語感」「言語感覚」が客観的にあるのかどうか？これは俄には決しがたい問題であるが、言語社会の構成員は、必ずしも均質ではない要素(年齢、地域的差異、教養、生いたち、その他諸々の偏差的に働く要因)を内包しているけれども、比較的均質と推定される集団では、一種の「集団的感觉」が拮定されるがこそ、言語によるコミュニケーションが成立つのである。

語感、言語感覚がいかなるものかを明確に定義づけすることはあたわなくとも、Wortgefühl あるいは Sprachgefühl の芽生えの徴表は外国語学習の際に、それぞれの習得段階で指摘できるのではないかと考えられる。意味的に正しい、整合性のある語彙選択 (Wortwahl) ができるという前提のもとで、その範疇では捉えられない要素を考慮するとして、ドイツ語に関して雑多な例を列挙するならば：

- ・名詞の語末尾の -e が、若干の意味グループ(語群)を除いては、女性名詞であることを合図していることに気づくまでの過程

- ・名詞の性の分類傾向に気づき始め、かなりの確率で推定できるようになるのは、語感ができはじめたと見做してよい
- ・ドイツ語の男性の Vorname と女性のそれと区別がつく
但し、これは Helge, Momme, Nanne, Uwe のような少数の例には当てはまらない、ドイツの子供達も間違うというのだから
- ・名詞の複数形の類別ができ、正しい形式が推測できる
- ・前置詞の用法に適切に応じられ、3・4 格支配を使い分けられる
- ・haben 支配か sein 支配かを区別できる
- ・分離動詞か非分離動詞かの区別ができる
- ・接続法と直説法、接続法 I・II の使用区分
- ・時制が適切に使い分けられる

以上 5 項目は機械的に分類した教科書の用法を適用できる範囲を越えた段階を指す

- ・doch, noch のような Flickwörter (Reiners) が使える
- ・複合語（合成語）を正しく解続できる能力
そして自ら正しく創り出す能力 例：Sprachsalat
- ・辞書に登録されず、随時、任意に生成される語を解釈・解読できる能力
例えば、Laryngitis（喉頭炎）なる単語から、即興的に創り出された Partizipitis (Unwörterbuch S.176) [分詞頻用癖]を即座に解するという造語論に属する領域。

- ・Affixoide を正しく判断できること

従来, Halbpräfix あるいは Halbsuffix と呼ばれている現象は合成語の第二の構成部分が意味のおよび音的独立性を喪失しつつあることによって、派生の接尾辞、接頭辞となったものであった。(sinn-voll, bedeutungs-voll, Bau-stoff, Grund-stoff, Riesen-hunger, über-fressen usw.)
ところが外国語との頻繁な接触による影響からか、現代ドイツ語には非常に特徴的で、且つ、生成力の高い造語手段が跋扈することとなった。それが Affixoide (Präfixoide, Suffixoide) である。

従来の造語手段が意味に関して、一般化の傾向をもつか、ないしは、具象性・具体性を奪う働きをするという、いわば、概念的傾向をもつ現象であった。それに対して Affixoide は言葉を感情的に、情緒的にするというか、言葉のもつ感情性、情緒性を高め、強める機能をもち、根幹となる第二の構成部分に対しては、感激・熱狂の色付けをしたり、批判的あるいは軽蔑・侮蔑の態度を表明する働きをするのである⁽⁹⁾。

(例: Traum-auto, Traum-frau, Lieblings-essen, sau-schlecht, mordsdumm usw) こうした現象は hundekalt, hundemüde, Hundewetter の流れを汲むものであろうが外国語学習者にとって、言葉の感覚、感情、情緒を表す領域が理性的・概念的な部分に比較すると把握しにくい、類推関係を持ち込み難い分野であることによって、この項目が語感にとっては避けて通れない、しかも、かなり進歩した段階での問題であることを証明している

このように列挙された事項に共通するものは何か？それは厳しい生硬な規範が明確にとらえて表現している法則ではなく、それを越えた、感性でとらえるべき領域に属する、実感・効果という曖昧な言葉で把握すべき境域の、言わば、表現形式の持つ「内包」とでも呼ぶべき要素が共通項としてあらわれているのではないか。それは Affektivität という用語で言い表してもよい。Affixoide という現代ドイツ語における重要な現象さえも、既存の専用素材(造語手段)では「表現性」に不足を感じるがため、新しく、やや即興的に、専用の材料ではないが、「表現性」の面では、新鮮さゆえに表現効果をより多く期待できる「新素材」の流用という方策を選択するのではないか。

表現したい理性的、概念的な部分は十分に伝達しえても、それを上回る情緒的、感情的部分、換言すれば、表現の「曰く言い難し」と言った部分をも伝えなくては、人間は伝達活動において、十分なる充足感をえられなくて、隔靴搔痒、もどかしさ、と言ったネガティブな心的印象が残るだけになる。

時制という文法範疇さえも、単純に現在、過去、未来と截然区別され使用さ

れているのではないことは、最近の時制論、言語統計が分類、解釈を試みても、納得できる整然とした結果が得られないという周知の事実からあきらかである。こうした分野の現象さえもが、先述したような要素の表現の役割を、一律ではないにしても、その一翼を担っているからである。

上記の諸項目は事象を網羅したものではないが、しかし、それからは概ね、感覚、乃至、感情・情緒を表すか、それを代替する機能を有する語、あるいは、言語手段が語感という現象と関わりをもつ、大きな契機をなしていると予想できる。文法規則を遵守しただけでは判断、処理しきれない領域。厳格で明確な規範が存すると見られているところに、感覚的な、直観的な、揺れ動く基準が適用され、判断される。こうした、言わば、灰色の部分に「語感」を発揮する余地があるのである。

純粋な文法事項と考えるかも知れないが、範例 (Muster) のあるところに類推 (Analogie) という心的作用が働くのであり、この原型、雛形と類推作用こそが語感の本質の一部を構成しているのである。

造語 (Wortbildung) を例にとれば、その経緯が理解できるであろう：ドイツの外国人労働者は言葉の教育に関して、その程度は千差万別であるが、概ね第一世代は初級以後は自然の言語習得に任せられていることが多い。そうした場合でも、造語の法則を類推で学んで行く。その萌芽は次の笑話のような例で紹介されている：医師の診断 “Sie sind allergisch” に対して、トルコ人労働者は、“Nein, ich bin türkisch, と答えたという。(W. Müller S.226)

これは -isch という由来を表す造語成分を、まず、französisch, jugoslawisch などの自分の出自に関して学習するため、未知の allerg-isch にも類推適用してしまうのであるが、幼児の言語習得においても屢々同じプロセスが観察される。

Eduard Hermann が、記憶と類推の間に働く合力が語感の基本である⁽⁶⁾とみたのは正しい。Muster を記憶していることは Amalogie の一形式をもっていることにほかならない。

III

以上は大略、言葉を受容という側面から眺めたものであり、発信を中心に考えたものではなかった。それではドイツ語を母語とする人々が Sprachgefühl という概念で処理している事項はどのようなものであろうか？ 日常の生活の中で、新聞、専門雑誌その他で論ぜられる項目、 Fehlerfreies Deutsch, Wegweiser zum richtigen Deutsch, Duden: Zweifelsfälle d. dt. Spr. あるいは言語批評家の著作で扱われる事項の傾向は大略、符合しているとみてよい。それらは通常、規範的であると見做されているらしいのにも拘らず、個人の判断する要素が介在する、不安定な領域を扱っている。我々はいま問題にしている「語感」と考えられるものをそこから読み取ることができるのではないか。

例を Fugen-s にとろう：Königskerze /Kaiserkrone; Schweinsleder / Kalbleder; Umlaufgeschwindigkeit /Umlaufgeschwindigkeit; Amtmann / Geschäftsmann; hilfreich /hilfsbereit; 一般人は Einkommenssteuer; Vermögenssteuer のごとく-s を挿入するが、専門語としての語の形態は-s を欠く；こうした判断の根拠は様々であるが、大別すれば、規範を遵守する方向に語感が働く立場と、各自がこれまで獲得してきた教育に由来する知識（言語の歴史に関するものとはかぎらないが）を基盤に、言語の形態上の、内容上の特異性を主張する立場とにわかれるようである。

以下、各項目を言語考察上の通常のレベル区分に従って、概観してみる¹⁰：

① 発音

Chemie, Orchester, Chiemsee, Chile, Chirurgie, König 等における ch, g の音価に関する揺れ、Logik, Politik 等の母音を長音か短音か何方で発音するか、外来の語を母語に同化して処理するかどうか

これらに関しては「発音辞典」が明確な指針を与えると考えがちなが、「辞典」もどのヴァリエーションを採用するかは編纂者の裁量で決定して

いるから、結局、採用されなかったものは語感の判断基準を公認されぬまま黙認されたこととなる。教育を背景とした教養ある発音（時には学術的でもあるが）と通常発音の相剋に不安定さの潜む余地がある。

② 正書法

発音と書記法との齟齬。例えば、Überschwang, Aufwand という名詞が下地にあるのだから、その形容詞は überschwenglich, aufwendig ではなく、ä が当然、通時論から予想される。言語知識としての、歴史に基づく判断基準が現前する言語意識に重畳したもので、他の場合には相関的、補完的に働く言語知識と語感が相反した場合であると考えられる。

③ 文法

前二項目が諸書において、どちらかという辺縁で扱われるか、言及されずに済まされるのに比べると、Formenlehre は、その多くの部分の判断を語感に委ねる領域である。前置詞とそれに依存する格が正誤の判断に窮する例を提供しやすい。

問題の遠い源は、ドイツ語が格の数にずれがあるにも拘らず、ギリシア・ローマの古典文法を踏襲していることにもあるのだが、数多くの例が見出され、その決着がつかない主な理由は、ドイツ語が今、急激に揺れ動く言語変化の一時期にあるために、用法が不安定であり、従って、不確定要素である語感が問われる事となっているのであろう。

格に関するものが中心となるが、ここでは一例を示すにとどめる：

格は Genitiv と Dativ が競合しやすい。trotz, dank, kraft, wegen 等々、格支配の揺れている例は枚挙の暇がない。ここでも言語使用（語感）と規範としての言語史に則った知識が相拮抗するのであって、辞書の記述は現実の用法の後塵を拝するのが習いであるから、同一の辞書編纂者でも矛盾した記述を行うことは稀ではない。

かてて加えて、前置詞は操作性 (Handhabbarkeit: W. Müller S.244) がよい、つまり、簡潔に、はしょった表現ができるため、本来の前置詞でないものが、ますます準前置詞として使用され、また、外国語からも同様の借

用が行われる : anlässlich, behufs, seitens, zwecks, pro, plus, qua, kontra, gelegentlich, südlich usw.

これらは格を明示しない形（冠詞類を付加しない形）で使用されはじめ、徐々に本来の前置詞の地位を侵そうとするため、格の帰属が問題となり、判断基準を語感に頼る結果となり、不安定な状態となるのである。

それでは、語感外国語を習い覚えてしまう非母語者にとって、安定した心的現象となるのだろうか。ところが、文法と語感は同一ではない。文法は母語でなくとも習い覚えることができるが、それは一事象として、個別に知識として慣れるにすぎない。語感是个別事象として存在するのではなく、Phonemgefühl まで構想するに至る、大きい構造の中の一事象として、各自の Idiolekt の中に組み込まれていると思われる。

④ 造語

他の項目に関しても共通していえる事であるが、この事項においても判断の基準は母語とする者にとって、決着がつかない。また判断の揺れ動く原因・根拠も地域性と言う共通項を有しているのも否めない。Schweinsbraten, Speisenkarte; Schweinebraten, Speisekarte 等も、北の地域では Fugenzeichen を好み、南の地方では、直接に造語成分を結合する方を選ぶとでもしかしいようがない。それぞれが母語を獲得するうちに、言語母型を内面化してしまっているからである。

言語用法の正誤を規範的に述べた文献では、異例、破格、例外と断罪される事例に事欠かない。規範的な態度を探る編纂者さえもが、「変動」と判定せざるを得ない場合も、これにおとらず多岐にわたる。ドイツ語は外国語から新しく言葉を借用する際にも、名詞の性を決定しなくてはならず、それが一律に決められず、揺れ動くのも、語感の発露の故である。jedes Tages / jeden Tages も外国人学習者には自明の事柄であるが、母語者にはそうではない。完了形 ich bin gesessen / gestanden / gelegen は学習者には誤りであるが、地域性

を尊重すれば市民権を得ることができる。

二つ以上の形式が競合状態に入りうること、言語は絶え間無い変化の過程の中に常にあるのだということ、それに付随して、移行の段階が意識できなくとも現在にも存在するのだという事を容認するならば、語感は母語者にとって、絶対的な尺度ではない。年齢、社会的所属関係、教養、地理・地域性、時間、あるいは自身の適応能力にさえ左右される心的実体なのである。

IV

確固たる基準が存在せず、「語感」の判断に委ねられる現象に、文構成要素の部分的省略(Ellipse)と同格(Apposition)を加えなければならないが、これらは前章で述べた諸項目と同じく、学習者たる我々には様々なヴァリエーションの中から選択する資格はない。我々は母語とする話し手から与えられたものを甘受するだけである。かれらが語感を通して取捨選択するものは我々にとって、規範以上のなものでもない。それでは我々は辞書と規範文法が与えてくれるものを忠実に規則どおりに組み合わせるだけでよいのであろうか？

しかしながら、我々は、与えられた脈絡によっては、最も無味な語さえ、感情を籠められてしまうことも知っている。Bally の例で示すならば：

eine fiebrhafte Krankheit

eine fiebrhafte Tätigkeit

前者は論理的・知的性格を、後者には感情的・情緒的意味合いが籠められている。辞書における「植物標本」のような⁽⁶⁾語が、話し言葉(書き言葉)では、話し手のイントネーション、つまり、話し手の状況、時々刻々の心的態度、脈絡から、語の機能、色彩、特殊な意味を描き出し、その本来の新鮮さ、色合い、強度、美を発揮する。

我々の語感に関する活動の余地は、あるいは、外国語学習者が当該語に対して持つであろう語感とその語を母語とする者が次元の異なるところで持つ語感

とを架橋する方策は、文体ないしは語彙選択の領域に求めるべきなのではないか。

H. Lindroth^④ は現象の複合体である「語感」をプロフィールするために、対を形成する語群を選び、それを軸に現象の輪郭を描こうとする：

1. 創造的語感—再生的語感 勿論、発信者とその受け手
2. 潜在的一顕在的 語感の作用は何らかの表現が語感に抵触する時に呼び覚まされる。
3. 安定—不安定 例えば、書きものをする場合、頭を悩ませるまでもなく、唯一無二の適切な語が心に浮かべば前者、逆に、他人にアドヴァイスを求めたり、どちらの表現を採用するか迷う場合は不安定な語感となる。
4. 自然自発的一熟慮的 3. では確実性が問題となったのに対し、直接的なものと検討吟味されたものを区別している。
5. 自由—機械的 我々は言語の型を具体的な、その状況に応じた材料で充たしていくのであるが、その構造的形式にある程度独自に立ち向かえば、それは「自由」である。
6. 具体的一抽象的 この具体的とは表象的の意である。
7. 快強調的一不快強調的

この考えを押し進めると、文体は語感の亜種となるが、少なくとも、Lindroth は「文体」とよばれるべき領域にも語感の作用することを認めている。語感というものが内在化された言語の型と思考型式の、寧ろ無反省な再生であり、感情性・情緒性とはあまり関係の無いものと、母語を中心に考えると断定されてしまうが、逆に、外国語を徐々に吸収していく、つまり、習い覚えた規則に従って話すことから、語感に則って話すまでの過程を辿るならば、それぞれの段階で規則に抵触すると感ずることを繰り返しながら、適切なものを選ぶ選択力を蓄積して行くのである。

言語を吸収していく過程には、慣用、習熟度がかなりの比重を占めるであろ

うが、それが全てかというところ、そうではない。言語外の事象、心理的事象に対する話し手の取り組み方、捉え方、理解の仕方、観点、その他諸々の要素が語の選択を動機づけている。

外国語学習上の語感とは語の選択、なかんづく、同義（類義）語選択の段階で問題となり、正確な意味分析に基づく類義表現の程度・段階づけ、差異づけから感覚的、直観的選択の段階へと進んでいく。

一般的な語から、もっと具体的な表現を選択することが文体性を高める方策だとされ、言語的創造性は同義語（類義語）と反義語（対義語）の使用にこそ現れるといわれる。これらは取りも直さず、意味の Differenzierung（分化、特殊化）の具体的な対応策にはかならない。文体の問題は外国語学習の習熟度の高い段階で、初めて考慮すべき問題と思われがちだが、幼児期での学習は別として、母語が完成した後で学ぶ外国語では、母語において既に文体意識が生じているから、語感を高める意味で「文体」は重要な不確定要素なのである。

註

- (1) ドイツ語におけるアルファベットの各字母に詩的情緒を託した言語遊戯的な小品は A. Schnack 及び H. Weigel を参照。
- (2) S. カンドウ「思索のよろこび」S. 106。
- (3) O. イェスベルセン「言語」（上）三宅訳 S. 280。
- (4) ドイツ語の「移動動詞」に関しては H. Diersch: Verben der Fortbewegung in der dt. Sprache der Gegenwart Berlin 1972 が最も詳しい。
- (5) Affixoiden について、その造語の現状と辞書記述に関して W. Müller 1982a S. 153-188 を参照。
- (6) H. Lindroth S. 3.
- (7) W. Müller 1982b S. 234ff.
- (8) L. Havas S. 450.
- (9) H. Lindroth S. 7-11.

参考文献

- Anderson, B. u. a.: Beyond the Dictionary in German London 1968
 Gleiss, A.: Unwörterbuch Hamburg 1981
 Havas, L.: Words with emotional connotations in bilingual dictionaries
 in: Acta Linguistica 1957

- Johann, E. : Deutsch wie es nicht im Wörterbuch steht Hamburg 1981
- Lindroth, H. : Das Sprachgefühl, ein vernachlässigter Begriff
in : Indogerm. Forschungen 1937
- Ludwig, Klaus-Dieter : Zur begrifflichen u. sogenannten nichtbegrifflichen
Komponente der Wortbedeutung in : DaF 15. Jg. 1978
- Müller, W. : Wordbildung u. Lexikographie in : Germanistische Linguistik
3-6/80 1982a
: Das Sprachgefühl auf dem Prüfstand der Philologie 1982b
in : SPRACHGEFÜHL (H. Henne u. a. Heidelberg 1982)
- Schnack, A. : Buchstabenspiel Stuttgart 1956
- Schippa, Thea : Zum Problem der Konnotation in : ZPSK Bd. 32 1979
- Weigel, H. : Die Leiden der jungen Wörter dtv 1159
- Der grosse Duden 9 : Zweifelsfälle der dt. Sprache Mannheim 1972
- Duden Taschenbücher 14 Fehlerfreies Deutsch Mannheim 1972
- Koelwel, E. : Wegweiser zum richtigen Deutsch Berlin 1965
- Kleines Wörterbuch sprachwissenschaftlicher Termini hrsg. v. Rudi Conrad
言語学小辞典 下宮忠雄他編著 同学社 1985

——文学部助教授——